

## 編輯 後 記

暫く前まで「地方の時代」という用語が流行した。しかしこのところ、この用語を見聞する機会がめっきり少なくなったし、その主張の調子もいくぶん低調なものに感じられる。実際に地方の時代が定着して論議の必要性がなくなったというのであろうか。もともと「地方の時代」が叫ばれるようになった契機は戦後高度成長期の中央集権的な開発、発展の行詰り、破綻の裏返しという性格が多分にあった。経済構造や政治機構、財政的基盤をそのままにしておいて、顔の向きだけ変えようというのでは、社会のあり方、動きの方向を

転換することはできないだろう。発想を変えることも必要だが、問題は姿勢を整え体質を改めることが根本のように思われる。

ところで最近「郷土」の見直しが論ぜられ、郷土研究も盛んになりつつある。単なる懐古、復古ではなく、歴史を温め新しき郷土を切り開くための拠所を掘り起すものでありたいものだ。多種多彩の所員構成で陣容が拡大してきた郷土研の果すべき役割も大きい。この辺りで郷土研究の「総合」ということについての論議や追求が必要のように思われるが、いかがなものであろうか。 (M.W)

### 愛知大学総合郷土研究所紀要 第27輯

昭和57年3月15日

〔非 売 品〕

編輯代表 歌 川 學

印刷所 富士印刷株式会社  
豊橋市前畑町38

発行所 愛知大学総合郷土研究所  
豊橋市町畑町